

保育記録にみられる保育評価の実態

椛島 香代*・原田 育美**・椎木 奈津美**

Key Words : 保育評価, 指導計画, PDCA サイクル, 保育記録

1 はじめに

幼稚園教育は「環境を通して行うものであることを基本¹⁾」としている。幼稚園教育は、幼児の過ごす場のあり方について吟味することから始めるところに特徴がある。幼稚園の施設、設備、そこにある様々な教具、教材などの物的環境と、学級集団、仲間、教師などの人的環境、そして時間も環境である。教師は、幼児の状態、季節など配慮しながら保育室内外の教具、教材の選択、配置等を工夫する。テラスや廊下、園舎の裏など幼稚園全体が環境＝教育の場として意識されている。幼児期の発達特徴を踏まえ、幼児の身の回りを整え幼児自身の内からわき出る興味・関心を原動力として自分の外側の世界について知っていくこと、それを支えるのが幼稚園教育である。教師は幼児の成長の道筋を見通しながら、必要な経験が可能となる環境を用意する。幼稚園の環境は、幼児の主體的活動を引き出しかつ成長を促すものでなければならない。

教育において評価が欠かせない。幼稚園教育における保育評価には難しい側面がある。幼稚園における保育は、一日の流れが連続して運営され、内容も遊びを通した総合的な経験を通して子どもの育ちをとらえる。その日の幼児の活動の状態によって教師は指導計画に執着せず柔軟に対応することも必要となる。また、それぞれの幼児に何が育っているのか、環境からのどのような刺激によって育ちがみられたのか、教師の援助と環境構成との関連はどうか、など様々な要因がからみあっているため保育評価の際に整理して考察すること、要因を明確に特定することが難しい。より効果的な保育評価を行うため保育現場では方法や観点が研修などの機会でも取り上げられ検討されている。

教師が、意図を持って構成した環境、活動に対する働きかけなどをあらかじめ示したものが指導計画である。環境にかかわって育つ幼児の望ましい姿をねらいで示している。ねらいが達

* 人間学部児童発達学科

** 文京学院大学ふじみ野幼稚園

成されるよう必要な経験ができる環境を構成し、自らの援助の留意点を示す。幼稚園教育における指導計画は、教師が構成した環境を幼児がどのように活用し、活動を生み出し、活動を通して望ましい姿に成長していくか、その過程を示した仮説である^{1) 2)}。保育実践後の反省、評価は、仮説としての指導計画の妥当性を検討することでもある。計画をもとに幼児はどのような状態になったのか、望ましい経験ができねらいが達成されたのか、また教師の環境構成や働きかけは適切なものであったのかなどの観点で検討される。予想した幼児の姿とは異なった、教師の援助がうまく働かなかったなど計画と実践の「ずれ」も、指導計画を指標として実践を評価すれば、なぜそのずれが生まれたのか考察しやすくなる。教師は、指導計画を保育評価に活用することによって先に述べたような様々な要因を整理し、保育の充実に結びつく保育評価を行うことが可能になるのではないかと。保育評価は、実践後の保育記録作成時にその日の保育を振り返りとして具体的に行われる。本稿では、保育記録を分析することにより保育記録上に保育評価がどのように現れるのか、そのとき指導計画をどのように生かして評価しているのかその実態を捉えていきたい。

II 保育記録と保育評価

保育活動は、指導計画（P）、実践（D）、保育評価と改善（CおよびA）というPDCAサイクルで運営されている。教師は、保育実践後に記録を作成する。記録は、教師が感動したり印象に残ったりしたこと、ある活動（遊び）の経緯、ある幼児の行動、保育方法や保育運営についての考察と反省、など様々な視点で書かれている^{2) ~ 5)}。前述したように、指導計画は幼児の育つ過程の予想、そのための方略を示した仮説である^{1) 2)}。指導計画と実践を関連づけて考察していくこと、つまり保育評価が保育の改善点を探る上でも重要である。また保育記録に記載された幼児の行動や活動の姿、保育方法、保育運営についての考察、反省は、保育評価であるといえる。さらに、保育記録は指導計画作成の際にも活用される。例えば、幼児の実態を捉えて次の援助の方向性を検討し援助の留意点とすることなどが保育記録上で考察される。保育記録は、PDCAのC（保育評価）A（改善）にあたる部分であるといってもよい。保育記録は保育の振り返り（評価：C）のみならず、保育記録をもとに計画立案の際には計画の妥当性の根拠を示すことでもあり、前の計画の反省を踏まえた改善（A）を包含するものでもあるからである。妥当性の根拠については指導計画の「幼児の実態」として書かれることもある。このような点からも、指導計画と保育評価は連動していることがわかる。しかし、保育記録が保育評価として機能するためには、教師が指導計画に記載された内容を意識して保育記録を作成する必要がある。そこで、二名の幼稚園教諭の協力を得て昨年度一年間、そして今年度一学期の保育記録の中で指導計画との関連で記載された記録部分を抽出し、それぞれについて保育評価の観点を考察していった。すると、幼児の発達、成長など変容過程での援助、遊びへの援助、保育運営、教師の援助方法や技術の検討に概ね分類できることがわかった。ここでは代表的な事例を取り

上げて指導計画、保育記録を抜粋し具体的に考察しながら保育記録にみられる保育評価の実態を明らかにしていく。

III 事例検討

提供された指導計画および実践記録を検討し、幼児に対する教師のかかわり、遊びへの援助、保育運営、教師の援助方法の検討の四点で端的な事例を抽出し考察を加えた。保育記録分析にあたっては、幼稚園教諭から提供された事例に椋島が下線を引き整理した。教師の援助は下線_____, 幼児の行動、様子などの実態は下線_____, 教師の保育評価は下線_____で分類し、事例考察を行った。

事例 1. 幼児に対する援助～4歳児幼児 A の指導経過について～

<指導計画に記述された4月のAの実態>

ひとり遊びが中心である。

- ・年少組のときに同じクラスだった友だちの近くにはいるが、自分からは声を掛けない。
- ・冒険の森で、一人座りこんで砂や石を投げたりくるくるまわったりする。
- ・畑で泥をにぎるものの泥団子を作るわけではない。
- ・つくしを満足するまで拾い集める。

<援助の留意点>

- ・Aの興味、関心の方向を探る。
- ・教師が①積極的にかかわり、遊びに満足感が持てるようにする。

<5月の実践～保育記録からの抜粋>

5 / 9 (月)「ナズナ、ハルジオン、オオイヌノフグリのってたなあ」と言いながら②保育者の手をひっぱりながら春の図鑑で見つけた花を探す。

5 / 12 (木) 砂場でK・Sさん、保育者と一緒に遊ぶ。「ここお願い」と言われた友だちの指示通りに動く。

5 / 20 (金)③保育者に「山作ろう」と声を掛け、穴を掘ったりバケツで水を運んだり、水道管をつなげたりと同じクラスの友だちと同じ空間で自分がやりたいことをする。

折り紙を折る機会があまりなかったので、「馬やうさぎの折り方貼ってあるよ」と声を掛けると④「あーいうの難しいんだもん」と言いながらも折り紙を取ってきて折り始めていた。次第に、折っている番号を確認するようになり折りかたの表示と自分が折っているものを重ね合わせて「こう？」と言いながら自分で折り進めていた。

5 / 26 (金) 教師が参加している遊びの輪に入り、⑤「山作ろう!!」と初めて自分から声を掛けてくる。

<週案(5/30-6/3)にみられたAに対する援助の留意点>

週の学年のねらい：友だちの遊びに関心を持つ。

⑥自分のやりたいあそびを保育者に伝えられるようになってきた。

⑦やりたい遊びの中で、同じクラスの友だちとかかわれるようなきっかけをつくっていく。

（原田）

＜事例の考察＞

4月の実態に、Aについての多くのことが書かれ教師がAについて問題意識を持ち重点的に援助を要する幼児であると認識していることがわかる。この状態を踏まえて教師は援助の留意点を示している。5月にはAについての記録が多く残っており、保育者が下線①で示したようにAとのかかわりを多く持ち様子を記録したことがわかる。特に年度当初などには教師が「なんとなく気になる」といった印象をもった幼児に対して自らがかわって幼児理解を深めることも多い。この事例でも同様である。一人遊びをしていたAが教師には自分の気持ちを発信していく過程が下線②③などに示されている。また教師との安定した関係性のもと、自分にとっては難しいと思われる活動にも取り組む（下線④）、教師の存在によって安心して自分の考えを表現する（下線⑤）など遊びに主体的に取り組めるようになった変化が示されている。

教師は、これらの状態を週案の実態に下線⑥にまとめている。幼児の変容過程をここで評価している。さらに次の手立てとしてAの実態と週のねらいと関連づけて立案された援助の留意点（下線⑦）が示されている。教師を拠所としながら友だちへの関心が芽生えるように働きかけるという配慮である。このように、保育記録を総括して指導計画の幼児の実態に保育評価がまとめられることがある。

幼児に対する援助については他の保育記録においても実践の事実のみが書かれ、それに対する解釈や考察はあまりみられない。指導計画立案時に幼児の実態をまとめる作業の中で保育記録を生かしてこれまでの援助に対する評価がまとめられる。指導計画に書かれた援助の留意点を実践すること→実践した時の様子（事実）を記録する→次の指導計画で幼児の実態をまとめる（保育評価）というつながりができている。週案の場合には、短いサイクルで検討が可能なので保育記録を踏まえ教師について援助についてより具体的に評価し援助の留意点などを改善していくことができる。

事例2. 遊びの援助～環境構成について～

＜4歳児6月第一週指導計画＞

ねらい：保育者と一緒に、関心を持っている友だちのあそびに参加する。

保育者と少人数のクラスメイトと場を共有する。（新しいクラスの友だちとかかわることが少ない子）

環境構成の留意点：(1) 使った泥団子は、クラスで個々の牛乳パックを用意し名前を書いてある場所に入れられるようにする。

(2) 集団あそびでは、クラス全員の子どもが参加をすることは難しいため学年の担任が交代で

行いきっかけづくりをして参加できるようにする。

＜保育記録＞

留意点 (1) に関して：個人の置き場所がなかったときは、靴箱にそのまま入れるので泥団子がこわれてしまうことがあった。①置き場所を用意することで、自分が作ったものに対して愛情を持ち遊びも継続していた。継続することで泥団子を作れるようになった自信から、何個も作る姿が見られる。すると、②個人で泥団子を入れる場所は、一つしかないのだからたくさん作ったときに置く場所がなくて困っている子どもでできた。また、③泥団子作りの遊びが継続しているときはいいが、違う遊びに興味を持ち始めたときに作った泥団子が何週間も個人の牛乳パックに置いたままになってしまっていた。④泥をもとの場所に自分で戻せるように、子ども達のあそびの様子を片付ける日を検討する必要がある。

留意点 (2) に関して：⑤「しっぽとり」「増やし鬼」は、クラスで範囲と時間を決めて行い全員がルールを確認できるようにした。また、⑥足が遅い子や運動が苦手な子に関しては少人数で「おいかけっこ」や「かくれんぼ」から楽しめるようなきっかけづくりをした。⑦繰り返しこのような場を子ども達の遊ぶ場で提供していくことより、クラスでの集団あそびやダンスなどをしたときに立ち止まるのではなく進んで体を動かす子が増えていった。(原田)

＜事例の考察＞

留意点 (1) について、下線①で評価を行っている。教師はその結果、下線②③の子どもの姿をとらえ次の課題として認識し検討すべき点を具体化している(下線④)。また留意点 (2) については、どの子ども安心して参加できるようにルールを理解する援助(下線⑤)、幼児の実態に即した個々への配慮(下線⑥)を行った結果が下線⑦に評価されている。様々な遊び、場面で留意点 (2) が生きていることがわかる。それらをまとめて下線⑦に評価している。

計画した留意点にそった実践の結果を幼児の活動の変化として捉えて記録し、その効果を考察している。また指導計画の留意点 (2) では「きっかけづくり」とされていることを「ルールの理解(下線⑤)」「少人数指導(下線⑥)」など具体的な手立てを講じた結果(幼児の姿)として記録している。子どもの成長を支える援助方法について具体的に検討し、その妥当性を吟味することまでは至っていないが、教師が様々な手立てによる幼児の変化を細かく拾っている。遊びを援助する場合、その遊びの参加人数や参加者によって遊びの内容が異なってくる上、幼児の経験も異なる。指導計画に示された環境の留意点を実践した結果、幼児の活動がどのように変化したのかを考察することは幼児が望ましい経験できているかを評価する上で重要な観点である。環境構成の面では、保育記録上に保育評価が現れることがわかる。

事例3. 保育運営～教育課程と保育実践との関連～

＜長期、短期のねらい(4歳児)＞

教育課程の「期のねらい」：身の回りのことを自分でやってみる。

6月指導計画のねらい：自分のものの管理を意識する。

6月第一週のねらい：ロッカーの使い方を意識する。

＜保育記録＞

・①はさみや糊など使ったものは、作れた満足感と早く次の遊びをしたい気持ちから片付け忘れ
ることが多かった。②幼児の気持ちを大切にしながら、自分のものの大切さを伝えた。③使った
ものをしまってから遊べるようになってきた。

・作ったものが大きすぎて道具箱に入らなかったときは、④作ったものを飾れる場所を設定した
り大きな袋を用意したりして自分で管理できるようにした。⑤作ったものを飾る場所を設定する
ことにより、他の子ども目にする機会が増え友だちが作ったものに対して興味を持ち遊びが広が
り持続していた。（原田）

＜事例の考察＞

保育運営は、長期的な見通しの中で教育課程との関連で幼児の育ちを捉えて工夫される。

教育課程は入園から修了までの期間の中で幼児の育ちの姿を配列したものである。教育課程と関連づけて考察することにより、長期的な見通しの中では現在の幼児がどのような位置づけとなるのか指標としたり、今後どのような方向で援助していくべきかを明らかにしたりすることができる。期のねらいをもとに現在の幼児の姿を評価し、短期計画で具体化したねらいを立案して保育運営は行われる。保育評価は、週と週にみられる短期のPDCAサイクルと、教育課程に照らして考察される長期のPDCAサイクルの中で行われていることがわかる。この事例でも教育課程の期のねらいを意識しながら教師が月、そして週の計画にねらいを具体化している。期のねらいに示された「身の回りのこと」は衣服の着脱、食事習慣、集団生活のために場を整えるなど様々な視点で考えることができるが、教師は幼児の姿を捉えて（下線①）最も重点的に指導したい内容を月のねらいとしてとりあげている。これが6月のねらい「自分のものの管理」である。さらに、週のねらいでは個人のもので置かれる場所、ロッカーに注目しその使い方を指導することになっている。ここに挙げた事例では、教師が多岐にわたる生活習慣の獲得課題に対して週ごとに一つ一つ丁寧に指導して（下線②④）援助の結果も評価している（下線③⑤）。教育課程にしめされたねらいを達成するために、指導の段階や指導すべき領域を明確化しながら保育を運営しているのである。

事例4. 教師の援助方法の検討

(1) 援助方法についての評価

＜ねらい＞

週のねらい：好きな遊びをみつけて、楽しみながら園生活のリズムを取り戻す。

一日のねらい：やりたい、やってみたいと思い、活動に参加する。

＜保育記録＞

クラスでは運動会の旗作りコーナーを設けているが、①子どもたちが運動会のイメージがもてるように②絵本を導入として使った。③すぐに興味をもつ子どもいれば、自分の遊びに夢中にな

り、まったく興味をもたない子もいる。④タイミングをみて声を掛けるが、せっかく遊びこんでいるのに遊びが途切れてしまうのは良くないので気をつけた。⑤子どもたちが作った旗を保育室に飾っていき、子どもたち自身が「やりたい」と思ってから取り組めるようにしていきたい。

<翌日の日案>

環境構成の留意点：前日に作った子の旗を飾り、子どもたちが（運動会について）イメージしやすいようにする。担当がコーナーにつく。（椎木）

<事例の考察>

運動会の動機づけとして（下線①）絵本を利用し（下線②）、その結果の姿が（下線③）連続して記録されている。絵本による導入によって「全く興味をもたない子」がいたことを捉え、次の方法として直接声をかけて誘っている（下線④）。援助に対する幼児の反応を見ながら、新たに働きかけが必要になったり、その方法を検討したりすることになる。この事例でもこの日の事例を受けて下線⑤に示すような教師の手立てが導き出され、次の日の日案に反映されている。

教師は、幼児が望ましい経験を通してねらいを達成するために様々な援助を行うが、その際ねらいを達成した幼児の姿を行動や状態としてイメージしつつ計画を立案する。しかし、そのイメージとは異なる幼児の姿がみられたとき（下線③）、援助を修正したり補ったりする。これは一日の保育実践の中で行うこともあれば（下線④）、この事例でもみられるように保育記録の中で考察して次の日の手立てを明確にしていくこともある（下線⑤）。指導計画の段階で援助に対する結果としての幼児の望ましい姿がイメージされることこそがすなわち仮説であり、仮説通りにならなかった時の援助方法の評価を行い改善にいかされていることがわかる。

(2) ねらい、保育運営の妥当性に対する検討

<週のねらい（3歳児）>

- ・誕生会に楽しんで参加する。
- ・友だちをお祝いし、誕生会を楽しむ。

<保育記録を見直した教師の考察>

毎月の誕生会の日の記録をみると、誕生児の子どもの記録にはねらいにそった記録（ex 恥ずかしがりながらも、保育者の質問に答える。プレゼントをもらおうと笑顔で「ありがとう」と言う。）が書かれているが、その他の誕生会に参加していた子どもたちの記録には、遊びに関する記録や身支度に関する記録が主となっており、誕生会のことはあまり書かれていない。つまり①週案で立てられたねらい「誕生会に楽しんで参加する」は、誕生児に関しては達成されているが、参加しているその他の子どもにとってどうだったのか検討が十分にされていない。②「友だちをお祝いし、誕生会を楽しむ」というねらいを立てているにもかかわらず、子どもの様子を記録していない。③誕生会が一部の子ども（誕生児）のものになってしまっているのではないだろうか。（椎木）

<事例の考察>

保育記録を見直して、保育実践についての評価を行っている。ねらいが十分に達成されてい

ないこと（下線①）、教師の幼児理解が不足していること（下線②）について気づいている。保育記録は、教師が「残したい」つまり重要であると認識した事項であるともいえる。ねらいに「友だちをお祝いし、誕生会を楽しむ」と立案していたにもかかわらず、誕生会に参加していた幼児の様子の記録がないのは、教師が参加する幼児に対する配慮や認識を欠いていたということになる。そのことを教師自身が保育記録を見直すことで自ら気づいたのである。保育記録も長期にわたって遡り検討することで短期の保育評価とは別の側面で幼児の育ちの姿や保育援助の妥当性について評価することが可能になる。

さらに誕生会のあり方そのものに対する問題意識も教師に芽生えている（下線③）。3歳児にとって誕生会に「楽しんで参加する」ことが可能なのか、そのためにはどのような誕生会の運営をすればよいのか、など今後の検討課題となっていくことが予想される。長期の保育記録の見直しは、日々の保育実践評価を深めるだけでなく保育運営や行事のあり方など学年や幼稚園全体の保育運営とも関連づけて評価、改善が行われるきっかけとなっていく。

IV おわりに

保育記録の中にみられる保育評価について事例を通して考察してきた。指導計画に記載された内容を観点として記録された保育記録は、保育評価として機能し保育の改善に役立てられていることがわかった。その中でもいくつかの特徴がみられた。1) 幼児に対する援助は保育記録には事実が書かれ、評価、改善（新たな援助の留意点）は指導計画にまとめられることが多い。2) 遊びの援助については、ねらいや環境構成、援助の留意点との関連で記録の中で事実（幼児の姿、教師の援助）→考察（評価、改善のポイント）が書かれている。また、3) 教育課程との関連で保育が評価されそれが週案に具体的に生かされる。4) 援助の妥当性を検討することで、次の援助方法が改善される。さらには、5) 保育記録を長い時系列で見直すことで教師自身の保育方法、保育運営に対する評価につながる。保育記録には様々な側面で保育評価がなされ、保育実践に生かされているのである。

保育記録は、教師個々が管理していることが多い。記録をもとに、日誌や指導計画の「幼児の実態」、幼児指導要録が作成されるが保育記録そのものをもちよって教師間で具体的に検討する機会はあまりない。教師個々によって書式や内容が異なり、記録の質にも個人差があると予想される。また、今回記録を整理した際にも指導計画と関連づけられる記録以外に忘備録的な内容、教師自身の感動や印象深かった内容など様々なことが混在しており、記録を見直す作業には時間がかかった。保育の改善に生かすために記録を活用するにはもっと整理したり、内容を精選することも必要かもしれない。また、幼児の行動や、遊びの状態など事実は非常に細かく丁寧に記録され量も膨大であるが、教師がその状態をどのように解釈し、考察し（評価）次の援助につなげるのか（改善）について、明確なつながりをもって書かれた記録は少ないと感じたことも事実である。今後は、保育記録の分析をさらに進め、保育向上につながる保育評価

のあり方をさらに検討していきたい。

注

- 1) 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領解説：フレーベル館, p.256 1.4, p.195 1.1-3
- 2) 小川博久 (2000) 保育援助論：生活ジャーナル, p.76 1.12-17, pp.194-216
- 3) 鯨岡峻・鯨岡和子 (2007) 保育のためのエピソード記述入門：ミネルヴァ書房, pp.44-52
- 4) 今井和子 (1993) 保育に生かす記録の書き方：ひとなる書房, pp.79-90
- 5) 関 章信 (1997) 保育記録のとり方・生かし方：すずき出版, pp.36-65

参考文献

- 今井和子 (1993) 保育に生かす記録の書き方：ひとなる書房
- 椛島香代・小林由利子・齋藤麻紀子・平山許江 (1995) 子どもをよみとる (1) ～幼児理解に関する
今日の課題：日本保育学会第46回大会文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領解説：フレーベル館
- 椛島香代・小林由利子・齋藤麻紀子・平山許江 (1996) 保育者による子どものよみとり～保育者記録
の分析を通して：日本保育学会第47回大会
- 鯨岡峻・鯨岡和子 (2007) 保育のためのエピソード記述入門：ミネルヴァ書房
- 松村和子・椛島香代 (2009) 保育記録を生かした幼稚園幼児指導要録の書き方：チャイルド本社
- 小川博久 (2000) 保育援助論：生活ジャーナル
- 齋藤麻紀子・椛島香代・小林由利子・平山許江 (1995) 子どもをよみとる (2) ～実際例の検討を通
して：日本保育学会第46回大会
- 関 章信 (1997) 保育記録のとり方・生かし方：すずき出版

(2011.10.5 受稿, 2011.11.9 受理)